

仮設住宅の継続的な支援の実践 in 釜石

初日は、餅つき大会の準備をしました。仮設住宅の方とお餅つきの為の機材を運んだりしました。そこでは、仮設住宅という場所の不思議な空間を感じました。仮設住宅にかき揚げを配りにまわりました。一軒一軒にドアを叩いて「〇〇さん」と大きな声を出さなくてはならない。そこには、「高齢化」という問題が深刻化しているように感じました。高齢化社会とはよく聞きますが、それは東京に住む私達にとってどこか「別の問題」であるように感じています。「高齢化社会になっているから、自分達の年金はもらえないんだろうな」って思うくらいの感覚でした。しかし、被災地では高齢化社会は深刻な問題となっていました。若い方の姿はほとんどなく、高齢者ばかりの仮設住宅がほとんどでした。若い方は、仕事の関係で、街で暮らしているようです。行き場の失った高齢者が仮設住宅に「取り残されている」と感じてしまいました。しかし、そんな仮設住宅でも、大学生の私達を見ると笑顔で出迎えてくれました。何度も「ありがとう。ありがとう。」と仰ってください、私達が支えられているような感じでした。そこには、同時に「寂しさ」も感じました。長い間、狭い仮設住宅での暮らしに疲れ切っているようでした。笑顔の裏にあるもの。それを、私達は向き合わなくてはならないと思いました。「東京からわざわざ来てくれたのね。」と仰ってくださいとおばあちゃんがいました。私達が行くだけでも、それだけでもこの街を少しでも明るく出来るのかなと思いました。仮設住宅の方から「何もしなくていいので、いつでも遊びに来て下さい。」と私達に伝えてくれました。人と人とが繋がり会う。そのことはどれほど「尊い」ことなのかを知りました。言葉だけではなく、笑顔が笑顔繋ぐことができると感じました。来てくれてありがとう。と被災された方は仰います。そして、私達は、被災された方の温かさに支えられます。「ありがとう」が私達を繋ぐのだと感じました。

夜になると一面の星空となり、このような被災地にも自然は優しく包みこんでくれるのだと思いました。あのような大震災で大津波の被害に遭っても私達は自然の「恩恵」を忘れてはならないと思いました。何よりも私達は「自然と共に生きる」存在であると感じました。釜石では、このような仮設住宅の人と人の温かさや自然の優しさを感じることができました。宮城県名取市閑上地区で活動した時は、津波で流された写真の洗浄作業を行いました。津波で海水に浸った写真の泥を落とし、綺麗にして、持ち主に返すという作業でした。そこでは、みんな笑顔の写真ばかりでした。色々な場所に家族や友人と行って、笑顔で過ごしていた瞬間を映し出しています。「この写真に映っている赤ちゃんは今どうしているのかな?」、「この子ども達は生きているのかな?」と様々な思いを巡らせて作業をお行いました。それは、いわば「間接的な支援」でした。写真を手にしたおばあちゃんが涙を流していたのを今でも覚えています。どんな思いでその写真を眺めていたのか私にはわかりませんが、こうやって被災された方と繋がり合うことができるのだと実感することができました。そして、今回の活動は「直接的な支援」となりました。被災された方と直接、接することができました。そこで、目の当たりにしたのが高齢化社会でした。私達は今後、

どのように被災地と向き合えばいいのかを考えさせられました。支援に終わりはないと思います。1995年に発生した阪神淡路大震災では「孤独死」という問題が社会問題となりました。繋がりを失いコミュニティのない高齢者がアパートで、一人で亡くなっていくことが続きました。街が元に戻ろうとも、被災された方は、その重みを生涯背負い続けているのだと知りました。なので、私達の活動も「終わり」はないのかもしれませんが。目に見える支援から目には見えない支援へと変わってくのだと感じました。そのために、私達はいつまでも被災地と「繋がり合って」いなければならないと思いました。

2日、仮設住宅の方が集まり、餅つき大会が始まりました。仮設住宅の方はみなさん「笑顔」でした。こんなに優しい笑顔に囲まれたのは久しぶりでした。住民の方と協力して、テントを張ったり、お雑煮を用意したりとしました。おばあちゃんが腰を伸ばしお餅つきをしていたので驚きました。昨日とは違い、笑い声に包まれた餅つき大会になっていました。外部からのゲストの方も招かれて、この小さな仮設住宅もたくさんの人々によって支えられているのだと感じました。小さな男の子や女の子もいました。いつか彼らや彼女らがこの街の力となってくれることを願っています。小さな光のようにかけがえのない存在であると感じました。

2011年3月11日、私達は大きな悲しみに包まれました。マグニチュード9.0。津波は40mを超えるほどの大津波が東北に襲いました。映画と勘ちがいしてしまうほどのあの大津波の映像をただテレビから観るしかなかった。毎日のように、流れていた被災地の様子も今では、3月11日にだけになろうとしています。政府は3月11日を「大震災の日」として、東日本大震災を忘れないようにと訴えています。しかし、そのような日を設けることが果たして正しいことなのかを被災地で活動していると疑問に思うことがあります。そのような日を設けないと私達は3月11日を忘れてしまうのでしょうか。そのような日を設けることが被災された方にとってなののでしょうか。私達はこの3月11日を忘れてはならないと同時に、被災された方と繋がり合うことを忘れてはなりません。釜石市は東日本大震災の時に、「釜石の奇跡」を起こしました。防災教育を行っていた釜石の中学生が地域の子どもや高齢者を連れて避難させたという出来事です。このことにより、生存率が98%となり「釜石の奇跡」と呼ばれることとなりました。釜石の奇跡は子ども達の「命を守る力」を私達に教えてくれました。このような釜石の奇跡について仮設住宅でお話しを伺う機会がありました。「本当は、奇跡と呼ばれて欲しくない。子ども達は地震が発生したら津波が来るといふ当たり前のことを実践しただけ。どこでも、そのようなことは起きて、犠牲者が減ることを願う。」という話は私の心に今もなお、残っています。釜石の子ども達が私達に伝えてくれたことを、私達が次の世代に繋げなくてはなりません。南海トラフ地震が迫りくる現在、守れる命を守るために、私達ができることを今、しなければなりません。2日間を通して、私達がすべきことは、「伝える」ということです。3月11日。あの日、あの時、何があったのかを私達は知り、被災された方と東京で暮らす私達を繋げることが大切であると感じました。この2日間を通して、たくさんのお逢いができました。そのお逢いの一つひとつに感謝をして、この活動を続けていきたいと思っています。